彰　武　雜　信

※五十嵐眞作

彰武に來てからはや一ケ年餘りにもなる、忙しいものだから氣付かずに居たが改めて考へて見ると月日の經つのは案外早いものだ。

その間に世の中もいろんな意味でずいぶん變つて居る。

彰武と言つても判然り御存じない方が多いかも知れぬが錦州省の北の隅、蒙古に近いところでそれでも鐵道だけは通つて居る、奉山線の大虎山と平齊線の鄭家屯を結ぶ大鄭線に沿ふチツポケな田舍町である。

治水工程處の開設されたのが、康德五年の三月、その時の處員は僅か三十五名でその中に紅二點のタイピスト孃が當時異彩を放つて居た。

然しこの數こそ少ないがその質に於て精鋭で强固な團結が中心となつてやがて增し且つ大きくなつた事は當然なことではあるが今になつて考へて見るとよくまあ成長したものだと當時の佗しさが追想される、今處員は二百三十二名、少し固苦しく書連ねて見ると次の樣に分類される。

技正	一名
事務官	一名
技佐	四名
屬官	一〇名
技士	二九名
試補	二八名
囑託	二名
雇員	六二名
傭人	四一名
臨傭	五五名
計	二三三名

この中に八名の女性が交つて居る。

新京を去つて新京を眺めると格別新京がよい樣に思はれる、奉天がよいとか、哈爾濱の方がよいとかよく言はれるけれども住みなれた故許りでなく新京が一番好ましく感じられる、然し新京に居る人がさまで新京をよく感じないことはこれまた當然であろう、新京が政治の中心であり、新興都市だから活氣があると言ふ許りでなくひろびろとしたのんびりした裡に目覺める樣な新鮮さ、近代的な美しさが充ち溢れて居るところに限りない魅力が潛んで居る。

その新京を南に三百粁、快足「あじあ」で三時間半、そこが奉天である。

奉天は大阪に似た商工業都市特有のあわたゞしい特に晝見ると古い歷史を持つ反面に渕汚くゴミゴミして居ると言つては差し障りがあるかも知れぬが畢竟はネオンの色美しい夜の街である。

奉天から北支連絡上最近頓に重要性を加へた奉山線に乘り換へて約六十粁、遼河の鐵橋を渡ると間もなく一時間半で新民に着く。

こゝまで來ると新京、奉天から較べると丁度外出衣から仕事衣に着替へた時の樣な感じがして綺麗だとか汚いとか言つて居られない緊張した氣持が一種あきらめの感じと交錯して瞬間複

※　彰武治水工程處

雜な氣持になる。

新民は今でこそ人口五萬にも滿たぬむしろ水、砂害地として知られて居る樣な街であるがその上日露戰爭當時は新民府と稱し人口も十二

三萬あつたと言はれる、水砂害の爲一九二七年に幾度目かの改築をしたと言ふ驛舍が或は又洪水が襲つて來はせぬかと惧れる樣に七八米小高いところに建てられて居る、驛の後方一帶の荒

れた砂原は過去に於ける洪水受難の殘骸である

新民の街も幾度か洪水に襲はれその度毎に砂に埋もれてこゝ數十年間に三度とか家を建て直して居ると言ふ。

新民から五粁許り離れたところに除り古くもない相當大きな廟が砂に埋れて屋根許り殘り釣鐘のみが傍の柳の枝に淋しく釣られて居るのを目擊したことがある。

現に昨夏の洪水にも澤山の耕地が一朝にして

砂原になつた許りでなく數十戸の家が屋根の下まで砂に埋つてしまつた、そんな土地柄である爲か街の西隅に柳河の河神を祀つた廟が建立され、治水安民を祈る光緒皇帝や當時の奉天督辨張作霖の扁額がある。

尙柳河の洪水にはいろいろな面白い傳說が流布されて居る、そして柳河の主が鰌であることも周く流布されて居る、新民には彰武治水工程處の治水工程事務所が設置され專ら新民附近の柳河改修工事の施行に苦心して居る、新民、彰武間五二粁間は每日朝夕二回鐵道總局の「バス」が通つて居る。

新民から柳河の左岸に沿ふて雨さへ降らなければ比較的坦々たる道路が無雜作に走り約一時間半で、又冬季なら一時間足らずで彰武に着く。

そして「バス」にはこれからは恐らく使ふことのないであろう機關銃が一應用意されて居るがこれも矢張り滿洲風景の名殘りである。

新京から朝十時の「はと」に乘ると夕方五時半には彰武に着き又午後一時頃彰武を出ると夜「はと」で新京に着く。四平街、鄭家屯を通るのが距離からの順路であるかも知れぬが途中で一泊しなければならぬ、だから雨が降らずに自動車さへ通るならば時間からの順路である奉

天、新民經由が最も便利である、勿論雨で自動車の通らない時は汽車で大虎山を廻らなければならぬ、ところがこの大鄭線の汽車がまた大變で貨車混合のため非常に遲い許りでなく腰掛は板張り、冬はストーブにランプと言つた代物で滿洲には何故一、二、三等車許りで四等車がないのだらうと思はせられる、そんなら彰武と言ふところは一體どんなところか。

いよいよこれが自分達の住むところかと改めて彰武を眺めて見ると轉た感慨深いものがある。

一言にして盡せば文字通り落莫たる街である。

人口二萬に足りない如何にも田舍らしい街で勿論水道はなく電燈さへない薄暗いランプの下で一日遲れの新聞を讀んで居る時など何とも形容し難い心からわびしい氣持になる。

又食物が單調である許りでなく兎もすれば不足勝で榮養不良になる懸念が多分にある。

住めば都と言ふことが速く實證される樣にと希ひ乍ら一ケ年餘りになる。

以前から彰武は砂埃りの多いところとは知つて居つたが普段は兎も角も四五兩月に至り心惜きなく之を體驗してその想像以上なのに一驚も二驚も喫した。

家の中は砂埃りが積るのみならず物と言はず體と言はずすべて砂だらけになり外は外で砂埃りの爲全く咫尺を辨じない。

兎あれ、過ぎ去つて見ればあれも懐しい思ひ出の數々にならう、滿洲で最初の治水工事に從事する爲に彰武に住んだ紀念として生れた子供に彰武と名付けた人もある。

一方治水工程處が出來て彰武の日本人の數が倍加したと謂はれるそれ程治水工程處の開設は彰武にとつて大きな出來事であつたらしい旅館、が三軒に、藝者が五名になつた、それだけ巷の話題も多い、特に滿人街の活氣は大したものらしい、街のにぎはひが全く以前と違ふと謂れる。

柳河は新開河と呼ばれ特に下流部を柳河と稱して居る、それ程に新民彰武縣境附近は柳が多い兩岸は柳が密生して砂丘の形成を助長し且つそれを固定して自然の堤防を形作つて居る、從つてその附近には洪水の被害はない、治水工法の一つの形態であると考へると興味が深い、それが彰武より上流に行くにつれて柳が段々尠くなる、土地が沙漠性を帶びて來る、そして蒙古人が段々多くなつてやがてそこに庫倫旗がある。このあたり丘陵性の原野が緩く波打つて何處迄も盡きるところがない、廣漠千里そのものである。庫倫の東北方に直ぐ沙漠が擴がつて居る、遠々林西、烏丹城方面から續く所謂內蒙沙漠の延長である。

「バルカン」と稱する馬蹄形の砂丘が數限りなく連つて大洋の怒濤にも似て居る、長い列をつくつた駱駝の隊商も珍らしくない、一幅の繪であり詩情が動く。

こゝに沙漠の奇蹟がある、それは柳河の或る小さな支流の沿岸に原始林があつて楊柳類は勿論、「キハダ」「モンゴリ」柏「イタヤカヘデ」「サンザシ」類が繁茂密生して居るとである、河水は常に清澄で河口には水田が經營されて居る。

この河が大清溝と呼ばれるも理りである。

又この附近の柳河の沿岸にはよく「マンモス」とか水牛の角や齒や骨が澤山見出される、

風成層と謂はれる黄土層の出來る以前に棲息して居つたものらしい、「マンモス」の珍らしい齒を博物館に寄贈して喜ばれたこともある。

同好者があれは何時でも御案内する。

庫倫は外蒙の大庫倫に對比して小庫倫と呼ばれその上蒙古人の中心地として殷盛を極めたものであると謂はれるが今は見る影もなくさびれ果てゝ居る、只白亞の喇嘛廟の風鈴が松籟に和して居るのが昔の面影を偲ばせて床しく感じられる。

今の庫倫は人口僅に五千、地隙の兩岸に發達した街もかへつて地隙の深い侵蝕に災されて一層哀運を助長されて居る。

小高い丘の上に立つて庫倫の街を遠望すると千一夜物語にある「バクダツド」の街が何となく似つかはしく思ひ出される。

旗の某科長は醉ふと必ず蒙古の唄を歌ふ、哀調を帶びた餘韻は容易に忘れ難い。

然し庫倫は何となしに魅惑的なところがあるらしく彰武まで來る人は必ず何とかして庫倫に行きたがる、そして一度庫倫に行つた人は二度と行きたがらないまでも永くその特異な風貌を忘れず何かにつけて懐しく思ひ出すらしい。

庫倫にも治水工程事務所が置かれて居るが土地柄、仕事柄所員は文字通りの苦闘を續けて居る、涙ぐましい程である、工事區域が廣いのに交通が不便なので乘馬を十頭許り置いてあるが工事の監督員がたくましい蒙古馬に跨つて沙漠を馳驅して居るところは内地などでは到底見られない。

茲に特筆したいのは從來馬に騎ることゝ銃を打つことしか知らぬものゝ樣に思はれて居た蒙古人が賦役に出て喜んで植林の仕事に從事したといふ事である、民族的覺醒の兆がこゝにも看取される。

所員中に唯一の蒙古人が居る、その名を「サラバ」といふ人氣者である。性極めて剽悍で勇壯な沙漠の騎士である。

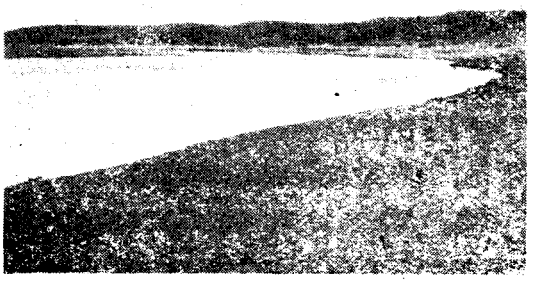
所長のA君の護衛として影の如く常にその傍を離れない庫倫と彰武の略中間に堰堤築造箇所たる閑得海がある。

斯うした沙漠の眞中に斯うした絶好の堰堤位置があるといふ事は柳河の治水の爲に天の下し賜つた一大恩惠であるとさへ考へられる。

汽車も自動車も見た事のない附近住民は發動機の音や「ダイナマイト」の音に驚き、連絡用の電話や夜間作業用の電燈に目を見張つて居る。

ここに逸早く工區詰所が設けられ今約七十名

の所員が起居して居るが門に立つ請願巡査の姿も仲々嚴めしい、堰堤工事でもなければ恐らく訪ふ人もないであらうこんな僻陬の地にも時節が來れば花が咲く。沙漠の花と謂はれる蒙古櫻や杏子は美しく芍藥や百合の花もこよなく可憐である。彰武、開得海、四十八粁間は道路が完成して非常に交通が便利になつた毎日彰武から開得海行の定期「トラツク」が出て居る、柳河に架けた長百三十五米の鐵筋混凝土橋に對し住民は驚きもし喜びもして居る。



開得海名物の一つに「スツポン」がある。

柳河の樣な砂川にしかも棒で河床をつゝき固いものに打當つたらそれが間違ひなく「スツポン」だといふのだから愉快だ、「スツポン」の好きな人はいつでも彰武にいたゞき度い。

最後に何處も同じであらうが田舍は田舍だけの喜びもあれば悲しみもある。

人間生活の三大要素である衣、食、住の內衣は兎に角として食、住の不便なのには全く閉口させられる、水が惡く食物が單調に過ぎる上に蝎の出る室に安眠も出來ぬ。

殊更に夏ともなれば病人が極めて多い。

あつたら有爲の才と燃える樣な野心を抱き乍ら不幸病魔に侵されて歸鄉、靜養の止むなきに至つて居る人も十指に餘る、家族の中には數名の犧牲者もある。

斯の樣に僻陬の地にあらゆる困苦と闘つて日夜聖業に從事する人の姿は全く尊い。

それではこゝらで一先づ彰武からの第一信を終りたいと思ふが五年前始めて柳河の調査に國道局から出張して來た當時日本人といへば彰武縣參事官只一人で何處へ行くにも嚴重な警備を必要とし、而かも時々匪襲に惱まされたその頃の狀態とすべての方面に躍進的なそして平和そのものゝ樣な現在の狀態とを思ひ較べて見ると新興滿洲國の輝きと技術日本の誇りとを痛感させられる。

會員諸氏へ御願ひ

◇轉居、轉任等なされた場合は必ず其の都度御通知下さい。會員名簿の訂正、會誌の發送其他通信事務會務整理上特に御願ひ致します。

◇機關誌建設原稿募集

論說、研究、資料、隨筆

寫眞……工事寫眞（撮影月日及簡單なる說明を附すること）

以上各種共掲載のものに對しては薄謝を呈します。新京交通部道路司內滿洲土木研究會編輯部宛御送附下さい。